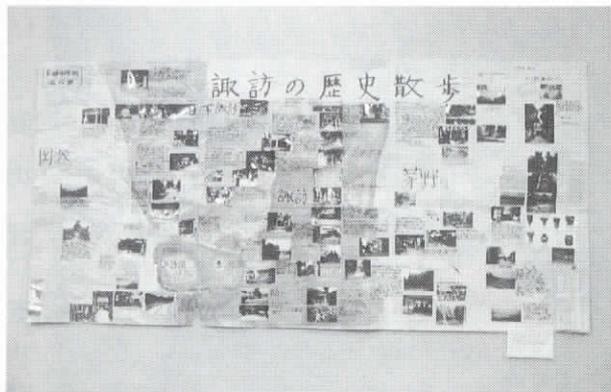


八ヶ岳通信

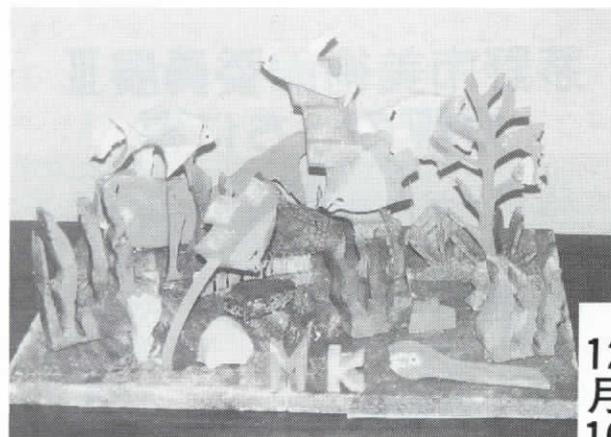


総合博物館



諏訪の歴史散歩 (長峰中2年 堀内翼君)

諏訪の神社や寺等を中心に、諏訪の史跡を調べ歩いた作品です。茅野や諏訪など地区ごとに色分けしたり、写真をふんだんに取り入れたり、詳しくまとめてあります。



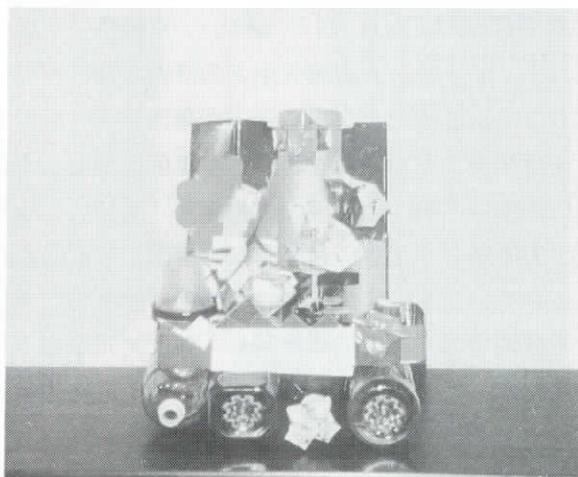
すいぞくかん (金沢小2年 小林まみさん)

発泡スチロールを切って、色を塗ってあります。手前の熱帯魚はプラスチックの板を工夫して使って、まるで泳いでいるように揺れます。

12月10日(日)まで

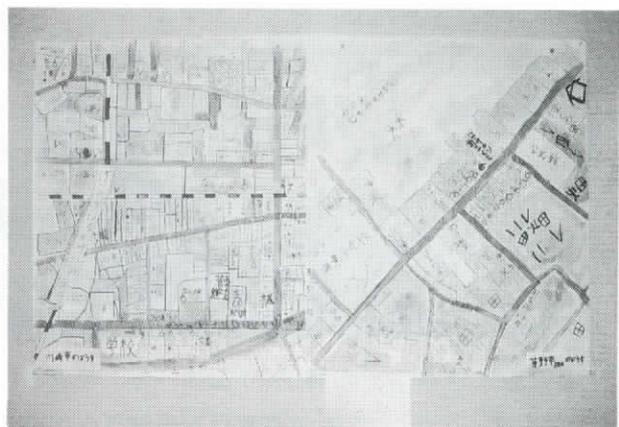
第7回 研究・創意工夫展開催中

今年も力作ぞろい



ほくのふね (玉川小1年 ふくだかずき君)

船の底は、ペットボトルでできています。折り紙の花や、やっこさんでかざっています。この船に乗ることができたら、きっと楽しいだろうな……



川崎市と茅野市の町の様子 (湖東小3年 小平翼君)

前に住んでいた町と、今住んでいる町を、自分の家を中心に絵地図にしてあります。

今年の市内小中学生作品展、「研究・創意工夫展」は、市内13校(小学校9校・中学校4校)のうち、11校のお友達の作品を集めて、ただいま開催中です。

今回は、どんな作品が出品されているのでしょうか?上に紹介した作品はほんの一部だけ。毎年継続して水生昆虫の研究を続けている東部中学校の自然研究部の作品や、「なめくじの研究」「がいとうにあつまるこん虫」といった研究物。「コリントゲーム」や太陽電池で動く「風車」等、工夫をこらした楽しい工作。「開発が進んでいる茅野市」「自然にかこまれた茅野市」と題した絵画。そのほか全部で260作品を展示しています。

夏休みに研究したもの、生活科の授業で作ったもの、図工の時間に描いたもの…作品を見ていると、みんながどんなにがんばって作ったか目に浮かんできます。

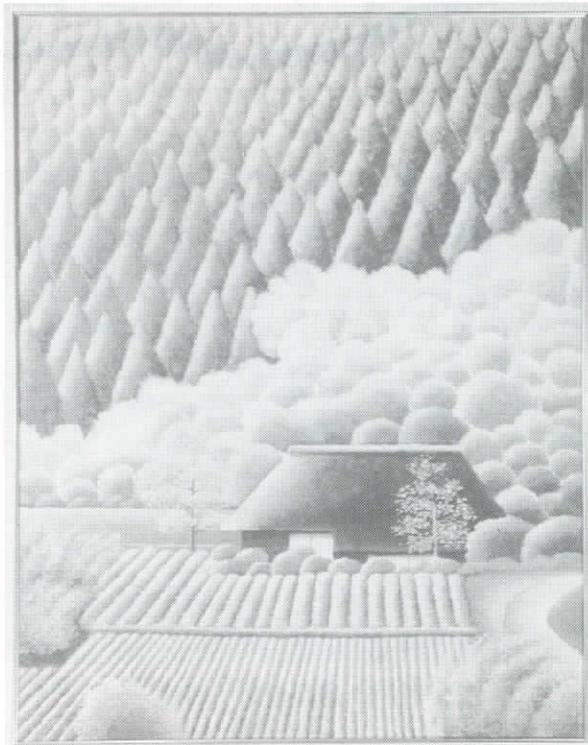
期間中、月曜日と11月24日は休館日ですが、そのほかの日は、9:00から16:30まで入館できます。お友達の作品や自分の作品を、お父さん・お母さんや、お友達と一緒に、ぜひ見に来てください。

常設展後期始まる

＝ 10月より新展示 ＝

本年度後期の常設展が、10月1日より始まりました。

今回は姉妹都市である伊勢原市の、芝山勇夫「春の音」、芝山幹晴「道漕まつり」、鈴木孝「横浜風景」、新妻英雄「こぶし咲く池畔」、平野杏子「高原の花（1）、（2）」の諸先生方の洋画4点と、シルクスクリーン2点、また日本画の伊藤博子「白馬秋霖」、矢島堯子「トルコの衣装」、今年度企画展、委員展Ⅲに出品して頂いた、書の津金孝邦「唐詩」、平林舟鶴「杜甫詩」、工芸の伊藤彰敏「驟雨」など65点が展示されています。また、矢崎博信の「山寺の二本松」、篠原昭登の「冬の柏原集落」、など地元を描いた作品も展示されています。芸術の秋、地元にある美術館にぜひお越しください。



「春の音」
芝山勇夫



移動美術館開催される

毎年恒例の移動美術館が、去る9月2日から9月24日にかけて、東部中学校、北部中学校で開催されました。昨年は北部中学校改築のため、東部中学校のみでしたが、今年は新築なった校舎で開催と言う事と、9月23日、24日に北部中学校が生涯学習の全国大会の会場になるという事で、例年より2日延ばし、美術館としても一段と作品選びに力が入りました。

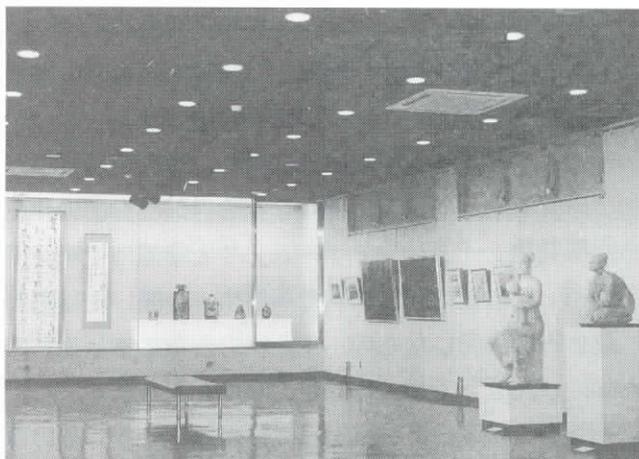
北部中学校では、作品を鑑賞した生徒から校長先生に、展示作品をぜひこの学校にという声も上がり、将来の芸術家の卵達に気を強くしました。

美術館は今後も、市民に親しまれる美術館をめざし活動していきます。

茅野市美術館委員展Ⅲ 好評のうちに幕

本年度の企画展「茅野市美術館委員展Ⅲ」が去る7月30日から8月27日まで開催され、好評のうちに終了しました。会期25日間の入館者は、620名にのぼりました。期間中充実した作品に、何回も来館する市民の方もいました。

また、8月のお盆の成人式に合わせた「小中学生保存作品展」は、新聞紙上等で氏名を載せたせいか好評でした。



尖石遺跡から土偶出土

尖石遺跡の史跡整備のための試掘調査が、今年は9月初めから行われ、多くの成果を得ています。

試掘調査は、平成2年度から行われています。調査開始当初は、遺跡の範囲を確認することを主な目的として行ってきました。その調査である程度の成果が得られたため、近年は住居址などの遺構の分布範囲と時期を確認するために行われるようになりました。

今年は、今まで中央の広場になると考えられていた箇所を調査しました。

この試掘調査で、縄文時代中期後半の土偶が出土しました。首からはありませんが、その他は手の先から足の先まで残っています。

土偶には、土器と同じ様に粘土紐を使ってつくられるもの（中空土偶）と、粘土の塊からつくるもの（中実土偶）がありますが、これは後者の中実土偶になります。

胸や背中、お尻に竹べらで線を書いた文様が見られるほか、足にも「わらじ」を履いているような編み上げの様な文様が見られます。

また、この土偶には製作するときに芯とした棒が炭となって残っていました。残念ながら木の材質までわかりませんが、その炭で年代測定を行う予定



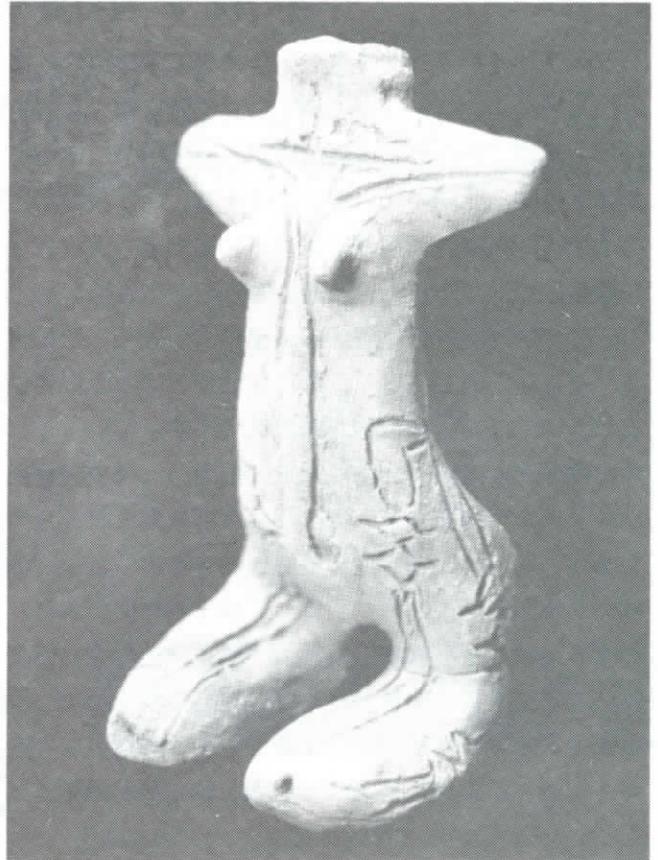
野焼き行われる

前号で今年の縄文土器製作教室では、縄文土器と共に、今年国宝に指定された棚畑遺跡出土の土偶（愛称「縄文のピーナス」）が人気を集め、製作されたことをお知らせしました。

その土偶や縄文土器を、約4ヶ月乾燥した後、10月22日に野焼きしました。

この土偶は中実土偶と呼ばれるもので、体の中まで粘土がつまっているため、縄文土器などと比べると非常に焼きにくく、割れやすいものです。

今回の野焼きでも、ほとんどは上手に焼けたものの、いくつかの土偶が破裂してしまいました。



でいます。

尖石遺跡からは、以前にも土偶が出土していますがそれらと比べても勝るとも劣らない優品です。

この土偶は、冬の整理作業の後、来春には考古館に展示されます。

また、発見された住居址は、調査中のため、はっきりした数はわかりませんが、10軒ほどになると考えられます。住居址の時期は、縄文時代の中期中葉から後半にかけてのものです。

これで発見された住居址は、宮坂英弐氏の調査したものを含め、尖石周辺で160軒ほどになり、遺跡の大きさを改めて知らされます。

すでに発見されている住居址とあわせ、分布を見ると、環状又は馬蹄形になるのではないかと考えられます。



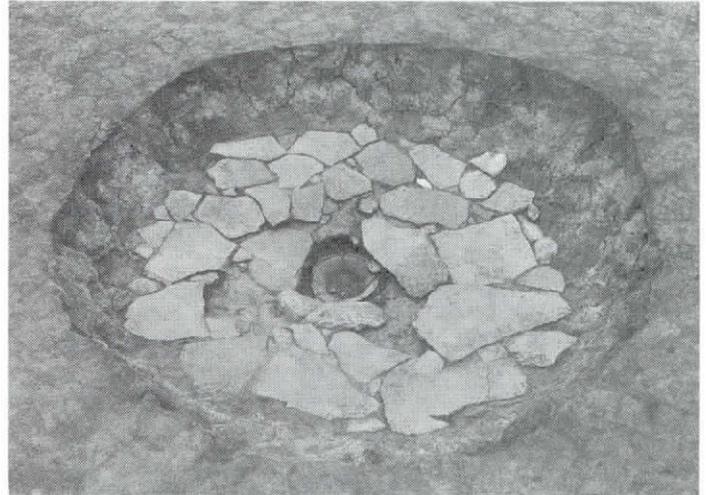
平成7年度の発掘調査概要

平成7年度も平成6年度に引き続き、茅野市内では県営圃場整備事業や都市区画整理事業、工業団地造成工事などの大規模な開発に伴い、多くの発掘調査がなされています。今年度も昨年度同様に貴重な発見が相次いでいます。その中で縄文時代の特徴的な遺跡の概要についてご紹介します。

新井下遺跡 北部中学校敷地内に位置し、学校建築に伴い調査が行われ、竪穴住居址13軒が検出されています。この中で特に縄文時代後期に属する住居址は、大人が3人位しか入れないほどの大変小型なもので、中央部には土器を埋設した炉が作られ、床面には平石が敷き詰められた敷石住居址という特異なタイプの住居址でした。市内において完全な形の敷石住居址の検出例は少なく、その構造が特殊なこともあり、この住居址がどのように用いられていたか、興味深いものがあります。

北山菅蒲沢A遺跡 北山芹ヶ沢に位置し、縄文時代前期末から中期初頭のムラの全貌がほぼ把握されてきつつあり、約13軒の竪穴住居址に付随するように、約200基にも及ぶ土坑（穴）が密集して検出されています。

梵天原遺跡 泉野槻木に位置し、縄文時代の狩りに使われた、落とし穴約60基が群をなし検出されました。同じタイプの落とし穴が一定の距離で並んでいる点などを考えると、この地が集団の狩り場として利用されていたことが窺えます。



新井下遺跡の敷石住居址

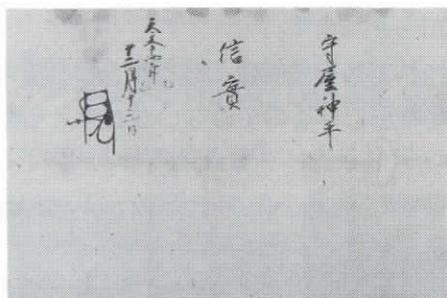
守矢史料館

展示室から 一資料紹介一

守矢家文書は、信濃の歴史を語る上で大変重要な意味を持つものといわれています。ですから、「武田晴信」や「織田信長」といった、誰もが知っている歴史上の人物からの書状も遺されています。

現在、守矢史料館に展示してある古文書は、「武田晴信（信玄）」の書状3点です。これら3点は、長野県宝の指定を昭和41年に受けています。

今回は、その内の一つ「武田晴信名字状」と、それに関する

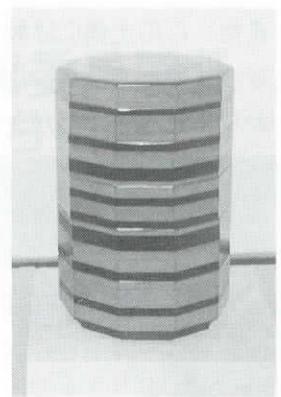


武田晴信名字状

「十角塗分け重箱」をご紹介します。

「武田晴信名字状」

は、守矢神平が元服するときに、晴信（信玄）が自分の名前の「信」の一字を与えて信實（信実）と名乗らせた書状です。神平の父は、書留を遺したことで有名な神長頼真です。頼真は、神長という立場上、諏訪信仰への影響力を持っていたことや、この後、正三位を賜



十角塗分け重箱

ったり、時の天皇の勅使を屋敷に泊めたりと、力を持っていたので、晴信の信濃侵攻のためには、是非手を組んでおきたい人物であったのです。ですから、このお祝いの引出物として晴信は「十角塗分け重箱」を守矢家に贈りました。漆塗りのこの十角形の重箱は、特に文化財の指定は受けていませんが、黄色・黒・朱色に塗り分けられており、漆工芸品の美術的な立場から見ても貴重な文化財であるといえます。